２０１８年6月28日　第74回 四ツ橋大学講座

「ジンバブエ野球会20年」

ジンバブエ事務局長　　伊藤　益朗

皆さん、おはようございます。ご紹介頂きました伊藤益朗（ますろう）と言います。私は関西学院の中学部、高等部、大学と野球をしまして、その後、鐘淵（かねがふち）化学というところで社会人野球をやりました。２年半位やったところで父親が死にましたので、商売を継ぐ為に辞めて帰って来まして、その後１年程してから、関学高等部の監督を11年やりました。そして、その後も68歳になる現在まで、継続的に野球指導の生活を続けております。関学高等部の後、身体障害者の神戸コスモスというチームでも十年余りコーチとして指導しましたし、兵庫県で初めて出来た社会人のクラブチームである全(オール)播磨硬式野球団の総監督も５年やりました。その後は尼崎産業高校で７年間コーチ、関学の大学で４年間ヘッドコーチをした後、現在も川西市内の高校でコーチをしております。名門チームの監督はそれはそれで凄いんですが、数年で交代したり、学校の定年と共に辞められるという様な事がある訳ですが、私の場合は外部からちょっと首を突っ込むみたいな形でやってきましたので、かえって今まで長続きできたのかなと思っています。

フィールド・オブ・ドリームス　―　現地に立って

ジンバブエの野球に関わり始めたのは全播磨の総監督をしている頃でした。野球場をジンバブエに造る時の協力者でありました村井洋介さんという方は、名古屋市出身で１９９２年から９４年にかけてジンバブエに派遣された青年海外協力隊の初代野球隊員です。野球がオリンピックの正式種目になったという事で要請があり、野球の指導者として行かれた訳です。そしてその任期の最後、94 年８月にジンバブエの小中学生を連れて日本遠征に来られました。その様子が連日、テレビで報道されていたのを見て、私は村井さんの存在を知りました。一方、当時私自身もいろいろな経験をしていました。母親が１年ほどの闘病生活の末に亡くなりました。それに加え、膳所（ぜぜ）高校から関学に来て大学野球部の同期で、ホームラン王になった張間君が４４歳で急に亡くなりました。これらをきっかけに自分もこれからどう生きて行ったらいいのだろうか、何か自分にも出来る事はないだろうかと考え始めました。他にもインドのマザーテレサの家にボランティアに行った事がありました。その時、マザーテレサとシスターたち、それに世界からやって来て一緒に働いたボランティアの人達、現地の人達の姿などをこの目で見たことも大きな経験でした。映画『フィールド・オブ・ドリームス』を観た経験もありました。たったこれだけの経験でもそれらの経験をすべて重ねて持っている人というのは、ほとんどいません。ある時、私の心に「あ、野球場を造りたいな」という考えが浮かんだのですが、これは誰でもが思うことではありません。先程述べた経験の数々をした私だからこそ思いつくことだと気付きました。それなら、私がする以外にない。私がしなければこのアイデアは永遠に葬られることになると気付きました。日本ではちょっとお金がかかりすぎるけど、海外の、途上国だったら、もしかしたらできるんじゃないか、しかもそれが役に立つのと違うのかなと思いました。

どこでなら出来そうかと考えたところ、テレビで見たあの村井さんに連絡を取ってみたらどうだろうか

と考え、日本テレビに電話をしまして、村井さんに連絡を取ってもらい、村井さんの方から電話を頂いたという事です。村井さんは一旦任期が終わっても、もう１回自分で現地に行って仕事をしながら野球の指導を続けるという事が報道で分かっていたので村井さんに連絡を取った訳です。そして名古屋のご実家に行き私の考えを話したら、お母さんも強く背中を押して下さり、「是非がんばりなさい」と励まして下さいました。そして、２人でジンバブエに野球場を造ろうと合意をしました。しばらくして彼はジンバブエへ渡り、私は日本を担当するという事で進めていきました。野球場の予定地が決まるまでに１年かかり「予定地が決まりましたよ」と連絡を頂きました。そうしたら募金も始めなければいけないので、やはりこの目で１回現地を見ておかなければいけない。そうでないと責任を取りにくいなぁと思いましたので、「行こうかな」と電話で言いましたら、村井さんは「伊藤さん、ジンバブエへいらっしゃいますか？」この「いらっしゃいますか？」の言葉が今でも脳裏に残っているんです。

それで初めてアフリカのジンバブエに行かせて貰いましたが、経由地のシンガポールまで行く時は神戸の女子高の修学旅行と一緒だったのでワイワイガヤガヤと賑やかな機内でした。シンガポールでは友達の家でちょっと休憩させて頂き、夜中の 12 時頃に南アフリカのヨハネルブルグへ向かって飛び立ったんですが、真っ暗闇の中を地球の反対側に向かって、まさに地の果てへ飛んでいくという印象でした。日本語も日本人も全くない機内が印象に残っています。私は心細い反面、ゾクゾクとする快感も感じていました。真っ暗闇の中で南アフリカのヨハネスブルグへ着き、ヨハネスブルグからジンバブエのハラレに向かって飛び立った時に初めて眼下にアフリカの赤い大地を見た時には感動したものでした。私が個人的な用事でアフリカに来ているんだという感動でした。

そして、首都ハラレに着いたら村井さんと、他に後任の野球隊員が２人出迎えに来てくれていました。そちらで何日間か過ごし、予定地を見学したり、その隊員達の活動も拝見しました。ハイデンシティと言う人口密集地の黒人居住区で、黒人の小学生相手に原っぱみたいな校庭で野球をしている風景が今でも目に浮かびます。キャッチボールにしてもグローブがあまり有りませんので、グローブを順番に次の人に手渡して、ボールを受けて返すという事をやっていました。ベースも絨毯を切ってベースの代わりにしていました。質素な中でも皆がすごく楽しそうに取り組んでいるのが可愛くていじらしい、そんな気持ちになりました。その光景が私達も小さい頃に原っぱでやっていたワンバン野球とか、三角ベースのような野球と重なって懐かしい思いをしたのを覚えています。

フィールド・オブ・ドリームス　―　実現に向かって

そして、帰国して、募金を皆さんにお願いした訳ですが、この時、40 年ちょっと生きてきた自分が皆さんに「すみませんが、ちょっとこんな事をするので募金に協力してくれませんか？」と言った時、果たして皆さん「お前の事なんか知らんぞ」と言われないだろうかと凄く不安でした。それまでの自分の生き様みたいなものを問われている気持ちになりました。ちょっと緊張しましたが、やってみたら自分の予想を超えた反応がありました。私の店のポストが郵便振替の入金通知票が来るポストだったんですけれど、日によってはちょっと分厚い時もあったりして、それを取り出した時には、「みんな本気やな」「これほんまにやらないかんな」という思いに駆られて武者震いしたのを覚えております。

そこから２年程かかりました。やっぱりアフリカは何をするにもサッサッサーと日本みたいにはいきません。例えば市長に何かの書類を出しても、届くのに１ヶ月や、２ヶ月、場合によったら半年もかかった

りとかするという事を村井さんから聞いておりました。そんな事で、結局２年かかりましたけれど、野球場が完成しました。私の分も含めて１０００万円の募金が集まりましたが、ちょうどその時に私の母校であります関学高等部が戦後初めて選抜高校野球大会に出まして、その沢山集まった寄付の中から３００万円をこの野球場に使って下さいとのご好意があり、頂きました。

完成したのは、98 年４月でした。内野は大リーグみたいに芝生で、雑草をちゃんと刈ったみたいな程度の外野。そこへアメリカからの支援もありまして、その支援はファールグランドの芝に。関学高等学部からの支援は外野の芝生の整備、バックネット裏の組立式のスタンド、更衣室、トイレに使わせて頂きました。球場は左右両翼が 99 ㍍、センターが１２０㍍という本格的な大きさで、そのグランドを金網フェンスで囲い、バックネットがあってという形ですね。芝生が生え揃ったこの野球場の姿というのは本当に美しい野球場で、その後、現地ジンバブエの子供達にとっては、日本の甲子園みたいな憧れの存在になったと聞いておりました。また、国際試合もそこで何回か行われました。

ジンバブエ野球会発足

ジンバブエに野球場を造るという私達の「ジンバブエＦＯＤ委員会」としましては、皆さんからの募金を始めてから完成まで、２年間もずーっと待ったをかけていた訳ですから、完成のご報告というのを皆さんに出させて頂きました。その時、報告書の一角に「今後の支援グループへのお誘い」という欄を作り、次のような文章を書いております。

「この度の球場建設計画に関して呼びかけ役をさせて頂きましたジンバブエＦＯＤ委員会は（ＦＯＤとはフィールドオブドリームスの事です）この野球場完成を区切りとして解散させて頂きたいと思います。そして、これを良き出会いとして今後のジンバブエの野球振興と野球交流に対して、その一側面からゆったりと気長に応援していく『ジンバブエ野球会』を発足させて、野球を通してこれからも長くジンバブエの皆さんと心で付き合っていきたいと思っています。当面は、今回の現地で中心となってお働きを頂きましたアフリカソフトボール野球連盟広報部顧問の村井洋介さんを通して、応援資金を送り続けていきたいと思います。その報酬は、物的には１年１回以上、できれば２回のニュースレター。精神的にはアフリカの人達との心の繋がりといったところでしょうか。これで年会費３千円で、事務経費を引いて現地に役立たせていきたいと思います。よろしくお願いします」

という様な文章を添えて、『ジンバブエ野球会』が発足したという事です。98 年の６月から始めて今年５月末で 20 年になりました。

その後は、今も言いました様にゆったり気長にという事で、あまりこちらが向うの野球を強化するとか、そういう事に直接携わらずにあちらに任すようにしました。初期は村井さんに任せ運営して頂きました。その村井さんも２００５年春には家族の安全や医療のため、ジンバブエを離れる事になります。ジンバブエはそれからハイパーインフレで有名になったのですが、１００兆ジンバブエドル札というのができました。それを最後にもうジンバブエは自前の通貨は止めてＵＳドルで賄うという時代になりました。一部、南アフリカのランドという通貨も使っているみたいです。

オールアフリカゲームで

98 年に野球場ができ、２００１年８月に、お配りした『ジンバブエの風』という会員向けのニュースレターでジンバブエツアーを募集したところ、25 名の参加でジンバブエの野球場、ハラレドリームパークの見学と観光に行って来ました。最初に野球場のある首都ハラレに行かずに、世界的に有名なヴィクトリアフォールズという世界３大瀑布の１つに数えられる大きな滝がある所に行き、その迫力に驚きました。国境に近い所でしたので、隣国のボツワナに入って象が一番多いチョベというサファリを堪能し、それから首都のハラレに入り、野球場で野球をし、野球選手たちと交流を深めて帰ってきました。

それから２年後の２００３年 10 月にオールアフリカゲームがありました。オールアフリカゲームというのは、こちらでいうアジア大会みたいなものですね。その種目の中に野球が入っていまして、アテネオリンピックの予選も兼ねていました。結果、ジンバブエは銅メダルで、オリンピックには届きませんでした。その時に私もコーチとしてベンチに入りました。店を嫁さんに任せて、24 日間留守にして出て行きました。この大会はナイジェリアのアブジャという新しい首都であったんですが、本番までの数週間はジンバブエのハラレドリームパークで強化合宿をしました。私も早めに行って１週間ほど付き合いました。それから、ジンバブエ選手団の一員として違う競技の人たちと一緒にナイジェリアに渡り、選手村で生活をしました。ナイジェリアに行くときの飛行機は国営のジンバブエ航空でしたが、飛行機が飛ばないという話になりまして、１日丸々待たされました。原因は、国の方がジンバブエ航空にずっとお金を支払っていなかったという事で、航空会社が飛ばないと言って１日丸々引き伸ばされ、前日集合した学校の宿舎みたいな所でもう一晩泊められたんです。翌日、私たちは「ジンバブエ選手団はナイジェリアに向けて飛び立った」という記事がトップ記事のなっている朝刊をジンバブエの首都の宿舎で見ていました。

ナイジェリアの選手村には、52 カ国の人が来ていました。主に英語とフランス語が飛び交っていましたが、大抵の国の人がお互いに喋れるんですね。日本人がアジア大会に行っても多分そんな事はないと思うんですけど、そういうのは凄いと思いました。他にもナイジェリアでは色々なことがありました。野球場は明日から競技があるというのにまだ芝生が敷かれてなくて、球場視察に行った私たちは作業員の人から「おい。お前も来て手伝え」と言われました。それから、試合をしていたら外野のフェンスが倒れてきたり、内野のスタンドにあったテントが強風で飛び上がり、それを止めようとした人がそのままテントと一緒に何メートルか飛んで行ったりとかしました。これぞアフリカという事があちらこちらでありました。僕らが帰った後、自転車競技場にあった西武球場みたいな屋根が風で飛んでしまって崩壊したとも聞きました。そんな事もホームページ（https://zykai2018.jimdo.com/）に、村井さんが書いておられるナイジェリアの逸話集みたいなのがありますので、ご覧頂けたらと思います。

関西学院が記念事業でジンバブエ代表チームを招待

２００３年のオールアフリカゲームでは、私と村井さんは仕事があるので選手団の飛行機と一緒ではなく先に帰る事にし、ナイジェリアで選手たちとサヨナラをしましたが、その時に私はもう彼らと一生会う事はないだろうという気持ちになっていましたが、関学の宗教総主事の前島先生のご尽力で、２００４年にジンバブエの野球代表チームを関西学院が招待してくれるという事になりました。２００４年に関西学院創設者のランバス先生生誕１５０周年記念事業がありまして、そのメインテーマが「アフリカ」。ラン

バス先生は宣教師として日本で沢山の学校を創られましたが、アフリカでも生前、宣教活動をされたということにちなんだメインテーマだったのです。学生と同年代の人を呼びたいという提案が通りまして、選手たちが 10 月にやって来ました。そして、私はジンバブエのユニフォームを着て、ジンバブエのベンチに入り、自分が生まれ育った関学高等部、大学、社会人も含めたオール関学と試合をするという夢のようなことが実現しました。

私が野球場を造ってみようと思った頃、そんな事が数年後に起こるとは夢にも思っていなかったので凄く感激しました。その後の歓迎会もジンバブエ野球会でやりましたが、その時には私と村井さんは感極まり号泣してしまうほど感動しました。そして、その時のニュースレター『ジンバブエの風』に素晴らしい文章を寄せて下さったのが松本さんでした。松本さんは村井さんよりも少し後のジンバブエの野球隊員で、第２の都市、日本で言ったら大阪みたいなブラワヨという都市で活動していた人ですけれど、書いて下さった文章の一部をちょっと拾い読みさせて頂こうと思います。「また会おうな」という文章です。

「11 月７日、日曜日に阪急電車の駅から、永遠に続く上り坂に息も絶え絶え、漸く関学グランドに辿り着いた。すると、そこにはジンバブエの文字を背負って来日した懐かしい面々が勢揃いしていた。ゆっくりと近寄って行くと、その集団の中でも一際目立つ小さな選手エマニュエルがまず「まっちゃん！」と私に気付き、叫んだ。その後ろからニョキッと顔を出して１９０センチを超える大巨人シェパードがでかい図体をちょこんと折り曲げて会釈した。すると、今度はその横から、アイバーソン（ＮＢＡのスター選手）ばりのドレッドヘアにピアス姿のやんちゃ者ネルソンがウィンクをきめてきて、乗り合いバスの運ちゃんになって野生的なおっさん顔になってきたモーガンがなにやら訳も分からないンデベレ語で挨拶し、ニヤッとした。かと思うと、小学生時代に野球隊員の村井さんに投球を後逸するたびに後ろから尻を蹴り上げられ野球を始めたラブジョイが目をまん丸にして微笑んで近寄って来た。ブラワヨの空港で別れを告げて以来、彼らとは５年ぶりの再会だったが、体のサイズ以外は何も変わってなく安心した。（ちょっと飛ばして・・・[途中省略]。）あの子供達が今や高校を卒業し、ナショナルチームの主力を担っている。兎に角、体はでかくなり、バットスイングは以前と比べ物にならない程速くなっていた。私が観戦したオール関学戦では、現役の大学４年生投手が投げたストレートにも力負けする事もなく、しっかり振って打ち返していた。試合の勝敗はさておき、４番のシェパードのレフトへの豪快なホームランが飛び出した時には、恐らくその場に居合わせた全ての方々もそうだった様に、自分も自然とガッツポーズをして飛び上がっていた。（ちょっと飛ばして最後ですが。）またジンバのみんなも帰国したら生活は大変だろうが、なんとか乗り越えて好きな野球を続けられる様たくましく生きていって貰いたいと心から願っている」

という文章でした。僕はこの松本君の心情がよく表れた文章が心にしみ、普通は村井さんの文章を一番に載せるんですけれど、この時は迷いなく松本君の文章を一番に載せたいと思いました。今読んでいてもなにか感動し、彼の心情が伝わってくるのです。

そんな事で、思いもしない事でジンバブエのナショナルチームが日本に来る事ができました。また、その計画を聞いて青山学院も創立１３０周年で、大阪から東京へ呼んで下さり、試合もして下さいました。この時の青山学院大学は最強のチームでして、今広島の小窪選手らがいたチームでしたが、10 月ですから新チームですね。その第１戦をジンバブエとやってくれました。14 対０くらいで負けましたけれど、そのチームがその翌年の春も秋も全国制覇したチームでした。そんな事もあって、凄くいい経験をして彼

らは帰って行きました。

人の繋がりがジンバブエの野球を支える　－　「僕の後ろに道はできる」

その半年後の２００５年４月、村井さんは、１３年間暮らしてこられたジンバブエは家族を持って生活するには無理があると判断されました。子供さんが熱を出した時でも、看護師さんがいない、薬もない。その為隣の南アフリカへ連れて行かなければならないという様な事でしたので、ジンバブエを後にして南アフリカへ移住されました。日本の協力隊が撤退したのは２００８年の４月です。３年後の２０１１年１月に協力隊は再開しました。

そのまた３年後の２０１４年１１月に野球隊員復活第１号の田澤さんも赴任しております。去年、田澤さんがここでお話をされたと思うんですが、聞かれた記憶のある方いらっしゃいますか？あ、そうですか。彼が、野球隊員復活の最初の人です。

その後、先程の来日時にホームランを打ったシェパードのビデオを元西武ライオンズの石毛さんに見て頂きました。石毛さんは、四国アイランドリーグという独立リーグを旗揚げされた時に理事長をされておられ、「それなら、テストに連れて来い」と言って下さり、テスト合格後、２年間香川で選手としてやっていました。その後クビになって、翌年は福井の独立リーグのチームで１年間やって、帰国しました。帰国後暫くの間は家の都合で野球とは関われなかったんですけれど、最近はまた野球に参加し、ジンバブエ野球の発展に貢献してくれているという事です。

２００１年の旅行に行ったメンバーの一人である溝畑智子さんは看護師さんで、私のコーチしていた神戸コスモスという障害者野球チームのマネージャでもありました。彼女が参加したあの旅行中、協力隊のメンバーが活動している孤児院の視察に行きました。その隊員の姿を見て、小さい頃からの夢であった協力隊に挑戦する決心をされ、合格後の２００４年からアフリカのマラウィで地域医療に貢献して、既に帰国され、新たな道に進まれています。

現在は、私がコーチをしていた元尼崎産業高校監督の岩崎さんが去年からシニア海外ボランティアとしてこれもアフリカのタンザニアに行ってナショナルチームを作り、監督としてやっておられます。彼は１０年以上前から、定年になったら自分もこのような形で途上国に行きたいなという事を言っていましたのが実現したという事です。

最後は、おかやま山陽高校野球部の堤監督です。おかやま山陽高校は去年夏の甲子園、それから今年の春も甲子園へ出たチームです。その堤監督は、元ジンバブエの野球隊員でいた。先程読ませて頂いた松本さんという元隊員の方と同時期に同じブラワヨという町で野球隊員をしていた方ですが、その方が今度この８月と来年の８月にジンバブエから３選手をそれぞれ招き、合計６選手を２、３週間ずつ一緒に高校の練習に参加させて強化する。そして、彼はこの年末に行われるジンバブエ代表チームの合宿に行って指導し、来年の９月か 10 月ぐらいに多分あるであろう東京オリンピックの予選にジンバブエのコーチとしてベンチ入りすると、そこまで言っておられます。彼の決断と行動力には、いつもびっくりする程の力があるなと感じています。

最初、私独自の経験の中から野球場を造りたいという思いが生まれ、しかも、日本では無理。外国で。そうして、村井さんと出会い、ジンバブエでということに。一歩踏み出したことから、繋がって繋がって最後は堤君のところまで繋がっていると思うんです。私にとっても人生のストーリーの中にアフリカとか

ジンバブエとかが入ってきた事は、あの時の野球場を造ろうという決断がなかったら、まずなかった話だと思います。そのストーリーと分かれ道は、日々誰にとっても直面することです。小さな事でもこちらの判断をすればこのように事が進んでいくだろう。でも、あの時にあちらを選んでいたら別の道へ進んで行っただろう。どっちがいいか悪いか、はないと思うんですけど、一つ一つの判断、選択には人生を左右する凄く大きな意味があるなぁとは感じています。そもそも２３年前の私の決断がなかったら、溝畑さんもマラウィには行ってなかっただろうし、岩崎さんも今タンザニアには行ってないだろうと思うんです。

それから、私が野球場を造った時に、つくづく感じたのは、「影響の連鎖」があるんだなということです。影響の連鎖という言葉がふと浮かんだんですけれど、誰かが何かをしたらそれをそのまま次の人に伝えていく場合もあるだろうし、何かを伝えたらそれを参考にして別のことを次の人に伝える事もあるでしょう。次々広がって行ったり、繋がっていって、事が進んでいく。そんな気がします。『道程（どうてい)』という高村光太郎さんの詩の一節を思うようになりました。「僕の前に道はない。僕の後ろに道は出来る」という詩です。自分の前を見ると自分が今後どこへ行くかは分からないんですが、今この場所から 20 年、又はそれ以上、後ろを振り返ってみたら確かに繋がっている。曲がりくねっているかもしれませんが、確かに繋がってここまで来ているという事を感じる訳ですね。目指した所へそのまま行けるかどうかは分かりませんが、振り返ってみたら確かに繋がっているというのは誰にとっても確かな事ではないでしょうか。

では、何故このジンバブエ野球会が 20 年も続いてきたのか考えたら、「無理をしない」、「ゆったり気長に」というコンセプトがあったからではないかと思っております。いくら募金を集めないといけないとかジンバブエのチームをどれだけ強くしないといけないとか、こんな活動をしないといけないという事は何もなくて、活動はジンバブエ現地の人にお任せ。それらジンバブエ野球の活動を全部丸抱えするんじゃなくて、側面から支援するというスタンスを守って、緩い活動を止めなかったという事が続いた理由かなと今思っております。その間にはやっぱり沢山の方の寛容とご理解があったからここまで来れたんだと感謝をしております。

野球指導を続けてきて

そうしましたら、野球の事をもうちょっとだけ。私はずっと野球を通じて若い人達と関わったり、若い人達の成長に寄与できたらなと思って指導を続けています。特に、プロ野球とか、大リーグとか、甲子園とかいうところの話題は皆さんのお耳にも達しているとは思うんですけれど、普通のそこらへんの高校とか大学とかの野球部では何を考え、何を原動力に野球をしているんだろうという事があまり伝わっていないかも分かりませんので、その一部だけちょっとお話させて頂こうかと思います。

私の野球指導人生は、超一流で甲子園に出たとかそんな事もないんですけれど、人を誘った事がない。自分のやっている野球チームに人を誘った事がなくて、来た人でやりましょうというスタンスなんです。だから、いろんな人が来ても、来たらその人と野球をやる。そして、その人に何かヒントになる様な事を提供できて、その人が喜んでくれたら無上の喜びという事なんです。それで、尼崎産業高校のコーチとして最後の夏の大会は、合併のため尼崎産業高校と尼崎東高校と尼崎双星高校という３つの学校名の合同チームでやって、ベスト８まで行ったんです。その選手らが卒業する時には、私は関学の大学のコーチになっていましたので、その３年生たちが寄せ書きを私にしてくれました。その中の２人の部員のメッセージを今日ちょっと写してきましたので、皆さんにご紹介したいと思います。「下手な私にも技術的な事を沢

山教えてくれて、ありがとうございました。伊藤さんがいなければ３年間続ける事はできなかったと思います。人として成長させて貰えたし、野球ももっと好きになれました。これからも元気で沢山野球の良さを伝えて下さい」という、まさにベンチ入りもどうかなという選手でしたけれども、大変嬉しいメッセージでした。もう一人は、最後の大会はずっと先発で投げたピッチャーなんですけれど「１年の時から何回も挫折した時に助けてくれたのが伊藤さんでした。本当にありがとうございました。伊藤さんの教えのお陰もあり、夏の大会は先発で投げる事ができました。そして、伊藤さんと出会い野球の深さ、面白さを学ぶ事ができました。本当にありがとうございました。いつまでもお元気でいて下さい」。私に対する寄せ書きなので、みんな私に焦点を当てて書いてくれたんだと思うんですけど、今のこの選手は１、２年生の時は大きいんですけれど殆どストライクが入らないピッチャーだったんです。それは剛速球で荒れているというタイプじゃなくて、そもそも投げるのが上手ではないタイプだったんです。本人もその事が分かっていて、それで練習中にはブルペンには入らない。投球練習をしない。そして練習が終わってから、誰か一人を見つけて相手をして貰って投球練習をする。それは練習中にその誰かにブルペンでキャッチャーして貰うのがちょっと悪い。自分みたいなものに相手になって貰うのが気が引けるという感覚を持っていたんですね。だから、日曜日だったら僕も行っていますし、練習が終わってから彼がブルペンでやるのでそれだったら見ようかと思って、ちょっとアドバイスをしたりもしていました。２年の最後の冬に、球の握りを変え２本の指をちょっと広げ気味にしたら球が落ちる。彼の場合、それが何球でも投げられる。凄い威力があるという程でもないけれど、いくらでも投げる。「これお前、もしかしたらおもろいんちゃうか」そのまま何球でも投げられたら、それだけで通用するのではと話したんです。私のいう所の「繰り返す力」のある投手でした。

しかし、監督さんが中々元々のエースを諦めきれずにおられたので、そのエースを主戦投手として私も指導していたんですが、球は速いけれど滅茶苦茶コントロールが悪いというピッチャーです。次こそは次こそはといって期待して登板させたけれど、結局監督さんも諦めまして、６月ぐらいからこのピッチャーに変えたらどんどんチームが勝ちだしました。兵庫県でベスト８と言ったら、５回試合に勝って、６回目に負けたということです。５回勝つと言うのは大したものなんです。それ位この人は成長したという事なんです。ブロック優勝して、春の優勝校だった東洋大姫路とやったんですけれど、勝って、それから関学とやってそこで負けたという事です。彼も凄く思い出に残る選手です。

私も次第に野球の仕組みを自分なりに掴んできて、それに基づいて指導していくようになりました。私が鐘淵化学に入った時に、結構有名な選手がいたんですけれど、中でも私の２つ上の佐藤選手は今年の春まで選抜の選考委員をされていた方で、スコアリングポジションにランナーがいるチャンスの時は変化球から狙うんやと言っておられたんですね。僕らは、そんな事を思った事もなくて、いくら相手が変化球を投げてきても、実際、ピンチになったら皆変化球を投げてくるんですけれど、私たちはそれが分かっていても直球が打ちたいんです。そういう気持はもう何十年経っても変わっていません。にも拘らず、当時すでに、平気でそういう「変化球を狙う」と言われる佐藤さんからは、たくさん学ばせて頂きました。

やはり、私をはじめ、多くの現役選手は自分がプレーしている時は自分のプレー上の心配で精一杯なんです。ですから周りが見えない。まして、守っている時なんかは飛んできたらどうしようという感覚ですからね。飛んできたら困るなというのではダメですね、本来それは。取っ払って全体がよく見え出したと言うのは、自分が現役を退いて目の前で他の人が野球をしてくれている状況、つまり監督になるとか、そういう立場になった時に、自分のプレー上の心配をせずに野球を見る事ができる。そうなって初めて野球

が見えてきました。

しかし、私が指導者になった当初、つまり関学高等部監督になった初めの２年間は公式戦で１回も勝った事がありませんでした。けれども、関学高等部は寛容で、何も言わずにやらせてくれたので、段々野球が分かり出だしてきました。こうしたらいい、ああしたらいいと。結局 11 年やった内で地区大会を突破して 11 回県大会に出ました。春と秋の県大会は、今よりもっと枠が狭かった時代ですから、結構大したものですし、２年間は１回も勝ってない訳ですから、９年間で 11 回出ているという事にもなるかと思います。

人によってちょっと理解は違いますけれど、野球の仕組みを理解してそれで指導していくという事がやっぱり必要ではないかと思うんです。やみくもに猛ノックをしたり、打ち込んだりではなく、勝つ為には何をすべきかという事を理解し、それに特化した練習をして、それで試合に結びつけることが必要かと思うんです。私の言葉で言えば、「水をやって陽に当てたら勝手に育つという事はないですよ」という様な感覚ですね。そんな事で、現在も尚、若い人と関わりながら、グランドでの生活を続けています。本日はありがとうございました。

以上、「うつぼだより」2018 年 7 月号 No.637 より転載

平成 30 年 7 月 20 日　発行
一般社団法人　大阪スポーツマンクラブ
大阪市西区靭本町 2-1-4
TEL06-6441-0975
FAX06-6441-0977
ホームページ　http://os-sportsmanclub.sakura.ne.jp
E-mail　sportsman@wonder.ocn.ne.jp